新按定跡

高等將棋秘訣

坤

66
137

東京圖書館

門	類	函	架	號	冊
		六六		一三七	二

新定跡按

高等將棋秘訣

坤の巻

故人　天野宗歩大人傳授

五段允可飯万島龍水大人稿按

無段　伊東洋二郎筆受

○角行落定石規箴

三枡の時八飛廻る手あり總て角落ハ釣合大切なるものなり下手の方より指す心あらべ負なり上手の方より指す所を大切に受て負べし古語に曰く角行落ハ勝つことなく負なきことなりと味わる箴

二金上らず五歩の突の時ハ七銀と上り右の如く指すべし大分意味深きことなり能々考ふべ

總じて角行落ハ釣合大切なるものなり上手方央までハ釣合す其末ハ手詰になりて自然と負になるものなり其考なく飛の方より年に仕掛て負になること多し能々考ふべし

五七の角上手に斯樣の荒手を仕掛能き事稀なり習無き故大に無理なり

駒組上りてから習にハ二五歩同歩同桂二六歩打三七桂同金ト取るなり習なれども五桂の打ある故に五六歩善し此所に此手ハ入らされども習ひ事故ゑ記すものなり二二歩くゞし此當りハ不出來なり是ハ二三香の裏を恐るゝと見へたり

八三王の上り習ひ事なり

八八の歩同飛七九の銀打つ手ハ是れ上手の作所下手の成らぬ事なり

八四の金ハ六五歩を突かせて角を出さぬ爲なり

七七の桂　上り難き事なり然れども是ハ敵若し九五の歩ト突かゞ同歩同香同香同金と取らん時四五の桂と躍ねん爲なり

角落にて仕掛來るを受るに落方飛の方へ金を離る時ゑ必〳〵王の方六七の筋及八九の筋より破る手出來るなり、味能く角を遣ひ破りても勝になるなり但し本方の櫓掛の駒立能なり初歩を突來る時も大切なり尤も歩を取ても請寄り手前に打ハ惡なり、歩を打ハ駒の働きを失ひ歩一ッの樣なり初歩を手に持てハ駒の働き格別宜きなり先への仕掛自由成るものなり

下手方五四歩突くよし

五七の銀上る手强みあり

第二十八圖

角行落其一

下手方櫓早掛り

香	桂		金	王		銀	桂	香
歩	歩	銀	歩	金			飛	歩
	飛	歩						
歩	桂		歩	歩		歩	歩	歩
香		歩		王	歩		銀	香
			金	金	銀		桂	歩

（說明）四銀三歩五歩五歩二歩三銀四歩五金右五銀七歩六歩八王七歩香八銀
八四歩六歩四歩六歩二歩六歩二銀四歩七歩七銀六飛夏五歩七桂にて下手方指宜し
（後手）七六歩六歩六歩四歩七歩六歩五歩七銀二飛五歩同歩同銀七飛六銀六四歩八王六歩同銀四飛△四八
（變化）香八銀の處六銀二飛五飛六銀〇五歩同歩同銀七飛五歩五歩にて下手方宜し
飛七三桂五銀七六歩八銀七四飛五歩五歩六歩八王六歩同銀七歩八銀七歩成同銀五歩同飛七三桂トブにて下
（變化）〇五五歩の處七八王六四歩☒五五歩同歩同銀七歩八銀七歩成同銀五歩同飛七三桂トブにて下
手方宜し
（變化）△四八飛の處五七飛七三桂四銀五五歩にて下手方宜し
（變化）☒五五歩の處三八金六三銀四七金七五歩五七銀六七歩にて下手方宜し
（變化）夏六五歩の處五五歩同歩五八金六六歩同銀成五六歩六七金五六歩五七銀四七歩同銀六四飛八五銀六六歩にて
下手方宜し
下手方七六歩と突き置きて後ちに六二へ飛を廻る手宜し夫れより七三桂飛ぶ手にて勝なり
上手方禦防の手段ハ最も考ふ所なくんゞある可らす
其下手方の七六歩と突くの手ハ百忙中に一閑地を挿むの妙あり、後ちに至りて七三桂を飛

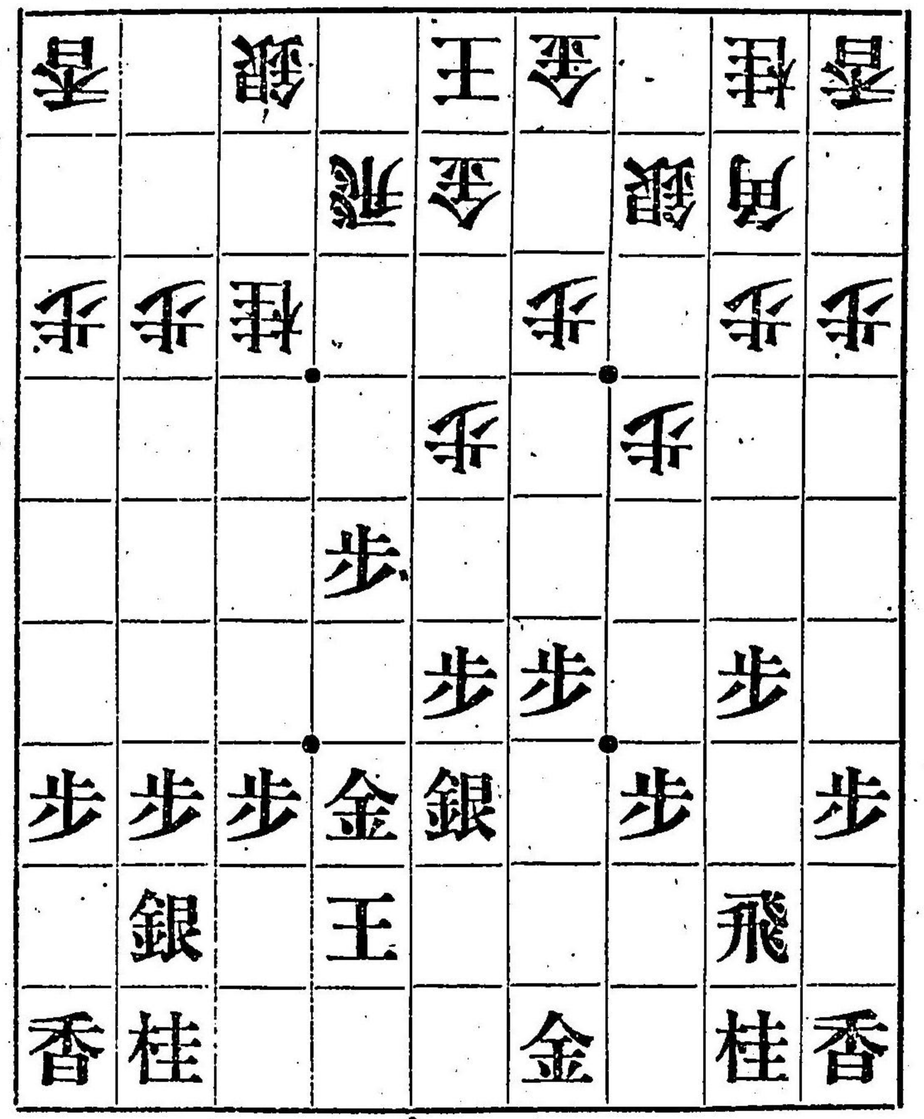
ぶの手ハ上手方をして驚魂動魄に堪へざらしむるの思ひあり、眞よ是れ絶特出群の指方と
謂ふべきなり
夫れ然り上手方ハ下手方の爲めに驚魂動魄に堪へさらしめらる故に上手方の指手局促する
所あるを見さるにあらずと雖ども、亦た大体ハ洋々として運用に苦しまず反應力ある手段
を用ゐて盤上を一蹶せんと欲するの概あるハ上手の上手たるに背かさるなり、若し夫れ棊
伎の妙手を知らんと欲する者斯種の定石を討究して怠ることなくんば則ち遂に敏活なる手
段を發明し伎倆著しく進むに至るべきあり、但し此宗石を討究して敏活の手段を發明す
るにハ即ち此定石を經とし尚ほ自己の考案を緯とし經緯相俟ちて以て伎倆を研磨する所あ
るべきなり

下手方五六歩突き七三桂上る手妙なり

六六の銀上るは不面白

第二十九圖

角行落　變化其二



（說明）四八銀　三四歩　五六歩　五四歩　二六歩　三二銀　四六歩　五二金右　五七銀　七四歩　六八王　七五歩　八六銀　七六歩　六六歩　六四歩　七八金　六五歩同歩　七三桂　六七金　六二飛

（後手）六六銀　六五桂夏　七六金　六六角　同金　五七銀　六六王　同王　七七桂成　六四歩　同飛　六五歩　七六金　五七王　六七金　四七王　六五飛　七四角打　五七金　同王　六九飛成にて下手方指宜し

（變化）○六七金の處　六六歩　七五桂　六八銀　六七飛　六七歩　同歩　同角　六八歩　四七角成　同金　七九銀打　三八飛　四八銀　同飛　五七金　五九王　四八金　同王　二八飛　三八銀　五七桂成　三九王　二六飛成にて下手方宜し

（變化）夏七六金の處　五五歩　七七歩　同桂　同桂　同銀上る　六五歩　七五銀　六三桂　五四銀　五五桂　五七金　七六歩　同銀　六六歩にて下手方宜し

（變化）△五七金の處　七六金　五七歩　六五金　同飛　同銀　六七金　五九王　四七桂成にて下手方宜し

但し此定跡は天野宗歩先生が京師の人へ書置れしを度々顯はすものなり

下手方六五桂と飛ぶ手は最妙方略の生する始めなり六六角捨て五七銀打ち終に飛先を破り後ちに六九飛成るは相手方をして防禦の便利を失はしむる爲めの良策なりと云ふべし

前の駒組は雄壯偉大なり之を以て大噴火の如く奔雷の如く疾風の枯葉を捲くが如く驟雨の

白珠を跳らすが如きの觀あり、棊道の秘契を知れる者にあらずんゞ則ち能く此の如き妙手を出すを得ず初學者深く味ひ見るべし

總じて棊道に於ける敵地を侵略する秘契は前に云ふが如き手段を以てするゝ勿論なりと雖ども、亦た輕々に進んで戰を求むれば則ち敵ゝ必ず止ることを圖るべけれゞ深く考ふ所なくんゞあるへからす夫れ進んで攻むるも退きて守るも二者各々時機あり矜式あり漫りに之を行ふべきものにあらず、我れ虛を以てせゞ則ち彼れ實を以て對し彼れ虛を以てせば則ち我れ實を以て對し虛々實々互に鬪ふ中ゑ苟も敵の油斷あり、手拔あらゞ則ち其機に乘じて快腕を揮ひ一擊して磐上を蹂躙するの心得あるべし

下手方四三の銀上る手面白し

角の進退を肝要とす

第三十圖

角行落變化其三

上特手方端指○下手方銀冠

香	桂		角	銀	金	金	桂	香
歩	歩	歩	飛	歩	歩	歩	歩	歩
	飛	金	歩	金	王	銀	王	
	桂	歩	銀	銀	桂	歩	歩	歩
				歩				

（説明）四銀三歩五歩五歩二歩三銀四歩四歩三金四銀五金三飛一歩二歩五歩三角三歩二金
八銀四歩六歩四歩六歩二銀六歩八金三銀八銀二金五角六王七金三桂六金左五一
五銀六王四金左七王五八王八王六銀七銀七王七金三金スク三
（後手）九歩九歩六歩六歩七歩七歩八歩八歩七歩二金二飛二金二飛三桂二歩成同飛二金一飛一香
六歩四歩六歩四歩六歩四歩六歩四歩四歩同飛五金二飛二歩同飛四金一飛三香
歩同歩二歩○同歩一香二歩二歩二飛二歩成一香三飛一飛三弦二香打二弦二香打にて下手方宜し
四歩五香三歩五歩二飛四歩七飛三弦三金打四弦三
同香二歩打一飛三金同角二歩成八香三飛成
（變化）○同歩の處同角二金二飛二金同歩右よても下手方指宜し且兩樣の內何れなりとも
指べし

上手方端の手指し宜く駒組を盡したりと雖ども亦た三三金少しく輕卒の嫌あり、後ちに角の三三へ拔行き折角の拔も香の爲め捨てざるを得ざるの結果よ至るゝ最も惜むべし、下手方駒組み勝太た宜しからずと雖ども亦た勝なり

龍拏虎攫併呑兼併其孰れか勝利を得るに至るかを想見し能ゝさるの觀あり下手方一二狡獪手段を施して遽かよ上手方を窘まじめ、遂に上手方を大敗せしむるの技倆ゝ誠に稱揚するよ堪へたり

凡そ我備ひ堅ふすへき所に些少の虛隙あれば則ち敵の狡獪手段を啗ゝさるゝと前の如きものあり豈に深く思ゝさるべけんや、然らば則ち備ひゝ最も嚴に堅め將さに施さんとする手段ゝ隱秘して豫じめ敵に悟り知られざるを要す然らざれゞ何ぞ能く我備ひを堅ふして以て敵と勝敗を爭ふを得べけんや、夫れ然り然り而して備ひを堅ふするにゝ先彼我對手の形勢を見て適應なる駒立と爲すとを眼目とすべし、其適應なる駒立を爲すにゝ指手の緩急得失如何を考ふへきなり

既に指手の緩急得失如何を考ひ以て適應なる駒立を爲すとあらん乎、凡そ將棋の妙手ゝ茲にありて存するなり何そ此他に妙手あるべけんや

此の駒組み下手方困難なり隨分要意すべし

七七の桂上る手よし

第三十一圖

角行落變化其四

上手方三筋飛車

香	桂		飛	金	角	金	桂	香
歩	歩		歩	銀			王	銀
								歩
	歩		歩	歩	歩	歩	歩	歩
	金							
			飛	銀	王	金	桂	香
	桂						歩	歩
香								

（說明）四八銀　三四歩　五六歩　四五歩　二六歩　三二銀　四六歩　四四歩　三八金　四三銀　六八銀　三二飛　一六歩　四一歩　五二歩　三三角　六三歩　五二金　一五角　三八飛

（後手）六二角　三五歩　四五歩　同歩　三五歩　三六歩打　三四銀　三五歩　同銀　同金　同飛　同飛　同角　三一飛　五七角　同王　七三銀引　八五歩にて上手方指克し

（變化）△三四銀の處　同歩　同金　三五歩　四六金　七二金㊥　二四歩　同歩　二三桂　二一歩ナル　二五歩　一六歩にて下手方宜し且つ一香にて宜し　三五金ならば　四五桂にて宜し

（變化）㊥二四歩の處　二八飛　三四飛　三七銀　六三金　二六銀　三一飛　二四歩　同歩X　二二歩打　三三桂　二一歩成　同飛　三五銀　二五歩にて下手方宜し

（變化）X二二歩打の處　一五歩打　三六歩　一四歩　五一歩打　三六歩　一四歩　五一歩打にて下手方宜し

上手方の駒組み宜し殊に飛の取換へより三一飛を打ち八五歩と突く手順當なりとす、而して下手方は王の先きと飛の兩方に傷みあれば油斷なり難し最も注意して上手方は當ることを肝要とす

若し夫れ下手方に於て王の先きと飛の兩方とに能く注意し幹支井然として亂れざるの手段を施すとあらば、亦た能く九死を起して生を回らすことを得べきのみ豈に深く此に思ふ所なかるべけんや

熟々此定石の形勢を見るゑ下手方ハ上手方の詐謀譎計に乘られしものなり、蓋し詐謀譎計ハ基道の特色なれば則ち能くして而も能くせざることを示し用ゐて而も之を用ゐざることを示し、近々して而も之に遠きを示し遠くして而も之ゑ近きを示し利して而も之を誘ひ亂るときハ而も之を取り實なる時は而も之に備へ、強ならバ而も之を避け佚ずれバ而も之を勞らせよ詐謀譎計を用ふると此の如く遺すとなくんば則ち歟に於てハ其指手を屹崛して敗を取るや必せり

○左香車落定石規箴

下手より飛緊きなき内に四の歩突くべからず

三五の歩大きに善き手なり

歟の飛車先明けて退くと如何と云へバ宗桂曰く是安と利知義に指て勝つこと堅し逆に依て六の角なり

四八香習ふ事なり遲早と云ふ事なり五九金引く時諸人皆四九に歩打つ前に云ふ通り是安手前に歩打事ハ大事と申されし意ハ是にて見へたり

五々の歩上手の爲ぬ事なり

四三の歩ハ遲早と申して是に達したる手ハ稀なる由なり

四七銀行く手妙なり

飛を引ハゆとりのゆきなとて上手の嫌ふ事なり

五六銀上るハ好手なり

七八金の離れ程の貧なり此金を四に置きたらハ能くあるへし七三の歩も三六と有り度よし、上手の咄なりき

上手の方より八八角打つ手あり尤も香と角と突くと雖とも角働きなき故角打手惡し

七七桂八六歩八五歩七九角八六飛九七角成るの順にて指すハ下手方大いに利あり古來此指手を鳥さしと稱す

下手方九四の飛上る手勝

五二の金圍みよし

第三十二圖

左香車落　其一

香	桂	銀	金		銀	金	王	角
				歩	歩	歩		歩
飛	歩			角			歩	
歩	歩	歩	歩		歩	歩		歩
			金		銀		王	桂
歩	歩	桂		歩		金	銀	香

三八王六七銀の手を用ゐず一四歩と指出さば四二銀と受け二八王と指し九四歩と突べ九六歩と受け四四銀三一角ならば八六歩同歩同角八八飛八五歩の指順にて下手方最も强味あるものなり

伊藤宗看の說に左香落の將棋ゐ下手方角落に對する心持にて、初め手合せしたる後ち中頃より平手の對手と心得直して宜しと眞に是れ格言なりと謂ふべし

●第三十二圖（說明）

七六歩	三四歩	八六歩	七五歩	七四角	四二王	七八飛	六二銀	四八王
九五歩	一六歩	一四歩	五八金	五二金	五六歩	九二飛	九八飛	

（後手）

六七銀	七四歩	同歩	同飛	六八角引	七四歩	七八飛	五四歩打	四八銀
五四歩	四六歩	八六歩	七五歩	八六歩	七六歩	八五歩打	同飛	七六銀
八六飛	九二飛成	七七銀						

同香七六歩打　八六歩　七五歩　八四飛　七六歩　九六飛　七六歩打　八五歩　同飛　七六銀　八六飛　九二飛成　七七銀

指克し且此指方は精選の內六八角引の變化の手なり

下手方の駒組み九四飛を七四又ゐ八四と轉して上手方の空虛を衝き角の筋を開く方略を專ら施すとわらべ其勝利を得る必然なり

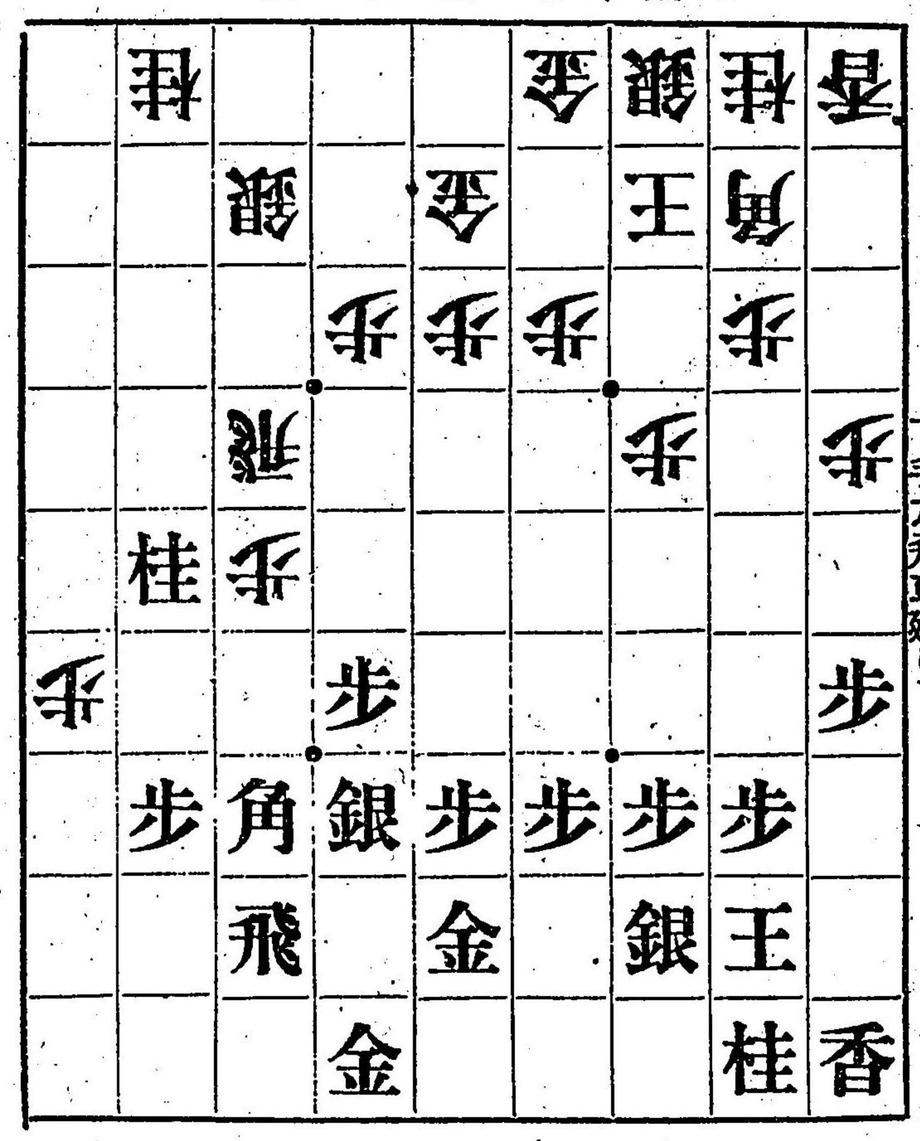
一手ゐ緩漫一手ゐ敏速にして實に鬪棋の眞相に契ふものと謂ふへし、其悠然角筋を開き後

下手方飛廻り端歩突きよし

飛換へ手考へて可なり

第三十三圖

左飛車落　變化其二



下手方飛車廻り

ち敵勢を挫敗せしむるの斡旋を爲すい力を費さずして手段の輕妙を稱すへし、故に角筋を開くの手い最初の一導火にして其後よ至りて爆然一發地軸を壞し轟然一聲天柱を摧かんとするものと云ふへきなり、何そ其手段の深遠にして且つ精細なるや亦誠よ嘆稱せずんばあらざるなり

●第三十三圖（說明）

七六歩　三四歩　六六歩　八四歩　七五歩　八五歩　七七角　四二王　七八飛　六二銀　四八王　三二王　三八王　九四歩　六八銀

九五歩　一六歩　一四歩　五八金　五二金　二八王　九二飛　九八飛　六四銀　七四歩　同歩　同飛　七八飛　七五歩　三八銀　九六歩　同歩　同香　九七歩

同香　同桂　九六歩　八五桂

（後手）九七歩成　八六角　八七と　七五飛　同飛　同角　七七と　五六銀　八九飛　八二飛打　七六と　八四角　八五飛　八六歩打　同と　八一飛　七二桂打　二六香　八四桂　二三香成　同王　四一龍　五一香打

前圖の如く下手方の差方を爲して終にとを以て相手を待ちひ飛桂を以て攻め入り角筋を開けが上手方防禦の術に窮し、亦た如何とも爲す能いざるものなり此よ於てか全然下手方の勝利に歸するなり

前の如く下手方が暫くとを以て相手を待ふものい即ち臆にして後ち飛桂を用ふるい即ち實

上手方歩を飛の筋より打つ手あり

下手方角取り換てよし

第三十四圖

左飛車落　變化　其三

なり、虚を提げて實に入り實より虚に出づるゝ棊法の秘契宜しく前に云ふが如くせずんバあるべからず然れども平凡の棊家ゝ大抵敵に虚實を窺へ知らるゝものなり、虚實既に敵に察知せらるゝあらば虚實の手段亦た何にかせん深く之を反省せよ

●第三十四圖（説明）

（後手）三八銀　四六歩　七八飛　五七歩　六五歩　八六歩　同歩　七七角　同飛　九八角　打　秋八二角　打　八九角　成　夏九一角　成　七六歩　春同銀八七る　八七歩　六六桂　六八金　寄七七る　同金　七八桂　成六七金　六九飛　打にて下手方指克し

（變化）春同銀の處　同飛　同銀　六六桂　四八金　七九飛　打にて下手方指克し

（變化）夏九一角　成の處　六四角　成七六歩　同銀　三六桂　八三王　八三る　引にて下手方指克し且上手方三六桂を取りて二八王と寄る迄なり是下手方より如何様とも指手あるへし

（變化）秋八二角　打の處　七八銀　六五歩　五五角　七三桂　一角　成二銀　二三る　六六歩　突して下手方指克し又六四歩の手五四歩ト突事次に六四歩ト突て指手あり初心にゝ五四歩ト突て指方宜し

下手方駒組み大に宜し飛を七八に廻し七五歩と打ち置きて後ちに勢力あり、夫れより六六

桂と打手にて勝利とならん

故ゝ前の飛を七八に廻る手と七五歩の手と下手方一番の指手中の坤軸と云ふて可なり、此駒組にして此二手なくんば何ぞ能く下手方の勝利を得るに至るものならんや世の棊技を學ぶ者の棊眼ハ宜しく此の如き所に注ぐを要す

抑も鬪棋の極意ハ妙手を指すこと一番中に其數多きよりも寧ろ其手數少くして盤上の形勢に剴切なるを主眼と爲す、故に此定石下手方の二三精妙の手ハ其終局に至るまて雄渾飛動の狀況を遺せるを覺ふ世の棋技沈晦顯はれさる者宜しく此れ等の定石を採り討究曲盡する所あらば、則ち敏手靈腕となるに至ること必すへきなり然れとも唯だ徒らゝ此定石を俎豆し或ハ之を尸祝して此定石を範とするより外に棊理を洞見すること能はざる者の如きハ太た不可なり、宜しく此定石を範として別に棊理を創見し其創見したる所を以て盤上に濶歩横行し名人上手を睥睨する所なくんばあるべからず、定石を學ぶ効茲に於てか始めて見るべし

五五の歩面白し

下手方端に注意すべし

第三十五圖

左香車落　變化其四

上手方端飛早廻り

香	桂	銀	金					
	角	王		金				
歩	歩		歩	銀	歩	歩		
歩		歩					飛	
	歩	銀	金					香
	王	歩	歩					桂
香	桂	歩	金	歩	角	歩	歩	歩
		金		歩			桂	飛

（說明）七三歩　六六歩　八八歩　七七角　八九飛　六六銀　八八銀　四四王　八八王　三三王　八八王　五五金　八八金　五五歩　六六歩　一一歩　四四歩

八二王　五五銀　三三銀　八八銀　五五歩　六六銀

（後手）七四歩　四四歩　六六歩　五四銀　四七金　四二銀　三六歩　六四歩　三七桂　五三銀　五六歩　同歩　同銀　五五歩　四五銀　四四歩　三四銀　七五歩　七八飛

二七飛にて下手方指克し此末上手方より一五歩と端を指て來る手あり下手方い端を怪くあしらい置て右の方へ入王の心持に指すこと宜し此の如く上手方最初に端を飛廻りたるに端歩を延すこと面白からず平生の心得肝要上手方五六歩ト受て指すときい下手方より六五歩ト突掛て指克し

下手方五六銀を四五へ上げ其機會に乘じ七二飛廻りて攻め掛る手、面白し上手方四五へ銀上る手考へて可なり

此番い指手の數最も簡潔にして駒の布置經緯の妙を見る、是れ天野大人獨得の長技よして大人の聲望千古に噪しき所以とす特よ此番の如きい手頭神あり駒皆活動して一の冗駒なし何等の妙棊ぞ、世の棊技を學ぶ者此れ等の駒組を宗紹して棊道を錬磨することあらば亦た必ず其技の進運を見るに至らん

九五歩早突き面白し

飛の活動を要す、

第三十六圖

左香車落（下手方居飛車構）變化　其五

下手方端歩早突

香	桂	銀	王	角	歩			
歩	歩	歩	歩	歩	歩			
							飛	香
						歩	桂	歩
					歩	銀	金	
					歩			
			歩					
		歩	銀	金				
香	桂	飛	角	歩	歩			
歩	歩	歩	王	銀	金			

（説明）七歩三歩六歩八歩七歩四角四王七飛六銀四王三王九歩六銀九歩
六歩四歩五歩五歩七角二王八飛二銀八王二王八王四歩八銀五歩
（後手）五金五金一二歩二王九歩同香○九歩同香同桂九飛九香打九桂此末
八金二六歩四歩八王六歩七歩六飛九香三桂
四歩六歩突掛て下手方宜し
（變化）○九歩打の處三銀九飛△七歩同歩六歩三銀九歩二角同銀六飛九香
七歩八銀二飛五歩八飛四歩五歩三銀四歩二歩二角六角
成桂七八金にて下手方指克し
（變化）△七歩の處六銀八飛五歩九歩打六歩八歩同歩七角同飛八飛八歩四飛七歩四歩二角六角
四歩四銀七七歩六歩七歩五歩六歩七歩六飛八歩二角
同角同銀七四歩にて下手方指克し但し初心にハ如此端を指掛ても宜し香車落の指方ハ上手
方も甚だ六ケ敷先生達も解し難きこと多し去れば少しの無理筋にても初心にハ端歩の仕
掛苦しからず能々意味肝要なり
下手方飛先さ九六歩に打ちて妙手あり七四歩にも妙策あり共に考慮すべし然れども相手方
九八飛九九香の處へ注目せざれば不可なり
若し夫れ此駒組にして下手方が一手たりとも緩漫の手あらば則ち失敗に歸せん故に深く考
慮して前ゑ云ふが如く、九六歩若くハ七四歩等の指手を施せば後ちハ電光一閃霹靂雲端よ

り迸ばしり驟雨熱を驅る長風涼を送りて生物の既に死せるを蘇息せしむるの快あるべし
蓋し此定石ハ一手一手と指せし所最も關係する所の細密なるものあるを見る、故に彼の零
々雑々として脉絡斷絶に多く内備の散漫外攻の寂寞たるものゝ比にあらざるなり、之を以
て互に指手雲山糢糊の狀なく鞭長莫及の弊なく貫聯疏通の妙あるなり世の某伎を研鑽する
に志ざす者の方便蹊逕を誘導指示するものハ實ゑ斯種の定石を上乘なるものと爲すべきな
り、棊道を學ぶ者ハ能く之を討査して其深遠なる趣味を探知せよ必ず大いに悟る所あらん
此定石の深遠なる趣味を探知討究して、我考へより駒に及び駒より手に及び順々手々或ハ
進み或ハ攻め或ハ破り或ハ突くとある時ハ上手方亦た下手方に對するの氣力全くなかるべ
きなり、下手方此手段を施して毫も疎放の擧動あるなかれ

○右香車落定石規箴

一五歩三七桂　指すハ奇謀なり落されの方より急に端を指すこと惡し駒組整ひて後自然と味有
べし
香落は平手の心にて善し上手より七四歩又は三七桂早く上ること成りがたし自然と香落の傷み

ある故なり下手方より手を指すへからす

二五角の時三六飛と引く手良し一体此指方下手の方四三歩の取り面白からず矢張八二飛と引く手良し上手と爭う形わりて損なり能々味ふへし

一五歩の時二六飛と上る事常なり三七桂上るゝ奇謀なり一六歩より仕掛させん爲めなり、左に記す此謀を知り一六歩を突かす駒組調るときゝ自然に香の弱みありて香落の方指惡し

二七歩成同銀九二香成此駒組は初心の爲め香の働を記す右香落は平手の心善しと云ふも此將棋の事なり

三二金大に嫌ふとなり假令三二金にて勝たんよりも是を五二金として負けよと申されける兎角將の班なるを上手衆は嫌ふとなり

香落の方へ惣駒の强みを仕掛てゝ破りても王將の方弱くなる故急に負するものなり先大將を圍ひたる事善し此將棋を香落の手本とするなり

先飛車を行へき所にて六二銀上る事惡し先飛車を行其後六二銀上りたる善し

三代目の宗桂の曰石田流にゝ七二金と上りて使ふなりと

二三銀を四三銀と打へき樣に何れも不審なれとも二四の歩成ざれゝ仕掛薄き故二三銀銀と歩の頭に打申事は是れ上手の所作なり

前にも記す如く香落方へ强く仕掛破りても德ある事なし香の頭へ飛をさかり勝事未だなし堅くすべからず

總じて香落の將棋の大事とゝ殊に習ひ事なり香落の方へ左のみかまゝず何れ其時に飛か角かを成り遙の德あるなり、又香下の方も歩を突き捨て遙に歩を打つ樣なる事許を德にすれば勝有り無理に破り將棋に勝つことなし能く考へて見るべきものなり

手前に歩を打ゝ一大事なり駒なくてすべき樣なくゝ格別なり幸金の繫と云ひ將棋ゝ勝なり故に銀打なり

六三角の時諸人八二飛と寄るべきに七一の飛ゝ習事なりと宗桂物語れり

七八金大きに惡し九八飛の如く香落方へ强く責て破りても明けて退く故に急に弱味あり

是安の曰三二金とある駒組ゝ終に勝つことを見す三二金にて負なり金ゝ大將の方へ參て良し是安是れを嫌ひ申さるゝなり

四七　金離れて惡しきこと宗看さへ離る程の負けなり兎に角に惡しきとなり五金左故へ勝なり二金と何時もの通にて勝負知れず此善惡を能々味ふべし此の手六五の銀と上らせて

是も三

十四手後に五に歩打るの道を厚く塞ぎ序よ先へも仕掛るなり

九四　金の手甚だ妙なり石田檢校以仙此金の手色々評判あり後よ皆々手を打て感じけるとなり

左角の方の桂を上り働く樣に向の敵の駒の當りを考へると多くあり甚だ妙ある處あり

初め一通り指來り中頃に至りて八七歩一九角二六飛四六角四六飛と指すれ即ち後手方先手方よ三筋へ座と見せて居飛車の仕掛なるが故よ妙なり、此手の後六五歩を突切りて角を替へ桂にて上るの仕掛巧みなりと云ふべしと伊藤宗桂れ話されにき

森田宗立れ右香落を欺待ふに平手の心持よ指すと可なれども、唯だ平手のみの心得なれば上手方に早く備ひを堅めしむる餘裕を與ふるに至るべければ下手方れ上手方の右端より崩しかゝるべきものとすと

八五の飛引く事深遠の手也

一六の歩を捨る事極めて敏捷

第三十七圖

右香車落　其一

香	桂	銀		王	金	銀	桂	香
	角	金		歩	歩	歩		歩
歩		歩	歩					
	歩		歩	歩	歩	歩	飛	歩
		桂					角	
	飛		銀	金	王	金	桂	香

（説明）二六歩八四歩二五歩五八歩七金三二金四八銀一四歩六九王春一五歩九六歩八六歩夏同歩同飛八七歩八五飛三六歩一六歩同歩一八歩三七桂秋一九歩成七六歩三四歩

（變化）春二四歩同歩同飛八六歩同歩一六歩同歩八六飛ィ七六歩にて下手方宜し

（變化）夏一三角七六歩八六飛二六飛三五角三六角四四角八七歩八四飛四四角同飛二六飛二四飛ロ七七桂一六歩同歩八一歩七五歩一九歩八六飛七二角にて上手方宜し

（變化）秋八五六歩三四歩二四歩同歩同飛二三歩二七飛一八と七六歩八角同銀二銀ニ七銀四四角と指行かゞ下手方大勝利なり

（變化）ィ二三歩二六飛三四歩八七歩八八角同銀八六飛三六歩五二金五六歩二六銀五五歩四一王と指せゞ下手方の駒組妙なり

（變化）ロ七二金七五歩五二王五九金四二銀六八銀八二銀七九王一六歩同歩一八歩三六歩一九歩成三七桂一七角八一。にて上手方は甚だ不利なり

（變化）ハ五六歩の處八四飛五六歩二四飛にて下手方宜し

（變化）ニ七七銀の處七七桂八二飛六五桂四二王四五桂六二銀二四歩同歩同飛二三銀二五飛二四歩五三桂成同銀同桂成同王五五飛四二王二二歩同金五三銀三三王五二角同金同銀成三三金五三飛成二二王の指順ならゞ下手方大に不利なりと知るべし

抑も右香車落の將棋は其一枚の右香車なき丈に弱味のあるものなれゞ、落され方が落し方の弱味ある方に向へ行くと同時に落され方は其弱味ある方にのみ備ひを堅ふして以て弱味を見せざるの欺待ひあるものなり、果して此の如くんゞ落され方は尋常の手段にて勝ち得べからざるが故に必ず奇警の手段を施して以て敵に衝らずんゞあるべからず其敵に衝る奇警の手段い如何すべき乎、例せゞ前に云ふ變化春二四歩同歩の場合に同飛と行かずして三四歩二六飛二三歩五六歩八六歩同歩同飛八七歩七六歩八八角同銀八二飛五五歩四一王三六歩四二銀と指す類なり、此の如く下手方より受らるゝときゝ上手方香の弱味必ず離るべからざるものなり

○平手定石規箴

三二王五九金左と指すことは是亦習事なり先の方より九五金の時五五歩突くへからず惡しきなり先方より敵五八金と指さゞ五五歩突くもありと知るべし此將棋受の方指惡し六四歩と突くときは

受の方より手ありと知るべし四六歩十分に指して受の方位負なり後手の方より三五歩突かば
二六歩突く手あり先ゑて三五歩を突かば石田の意なり早く四八銀考ふべし
八五桂躍ねんとならば四二銀上り後五三歩なり五三銀と取れば飛車繁々故に善し又八角引くとき三
角七五歩七五歩七八飛寄る手もあり考ふへし
後手の方より二四歩突かず七七銀三二銀と指す時は歩持ちたると持たざるとに德あり
美濃には四六歩突くへし後角の白眼にて三六桂の打あり先の方も敵美濃圍と見るならば五四銀定
跡と知るへし
三六歩七四飛と行くときは七六歩惜むべからず總て石田の受駒上り殊ゑ大切なり石田よりも敵に
此の如く組すれば位負なり初手の内に手の出る樣に指すへし
後手方より三七桂と上る時七五歩と突くは本書の手あり突くべからず七五歩突く時分あり見合せ
突くべし定跡なり二四歩突捨る時二四銀定跡なり相櫓に好みては組まぬものなり
初めゑ角替六五ゑ打つこと上手の爲す手なり角筋惡しき故大きゑ嫌ふ角は何方ゑ打ても五
五の歸る樣に考ふべし

先の方より敵に角を換へさする樣ゑ指すべし五五歩突くは四三銀下に定跡なり又市組は端に手
ありと知るへし總して端の傷みに敵の歩切を見て端へ掛るへし又敵歩ありとも端傷むこ
とあり夫れも外に能手あらば見合せ請の方も多く端より破るゝなり受仕掛共に端の歩專要
なり尤も五々に妙手ありと考て能々味ふべし
四六歩の時同歩取ることは惡しゝ五八金と上るべし
二四歩は五六手早し大將を心の儘に退きてから後仕掛るなり是を是安流と云ふなり
後手の方より袖飛と指す時は早く角引換へ指すべし
先の方も敵六七銀早く上り七八金と突かば袖飛車と心得三三銀と受て指すべし
七七銀上らず七角五二金六八角四三金七七銀四二王此の如くに指すは先手方合櫓を嫌ふてなり七角の上
り面白し
二四歩七八王二五歩同飛同飛同桂如此ゑ指すときは二四歩の突惡しゝ三七桂上らず六八王と退くときは
二四歩の突き良し
三六歩の打先手の方面白し三五歩四三銀と引かば後に四五歩の突ありて先手宜しからず總て當らずに

指すへし三六歩の打含み深し能々味ふへし

四五歩の時同桂四七金と上るべし歩突き換へ桂に歩打べし四五に仕掛ある故良し

三五角と打せ一五角面白し双方共駒の上り大事なり能々考ふべし

三二金七八王の手先手の方惡し三二金と上る時ハ強く此方へ指込手段なり七八王の寄惡し四八飛と寄り請へし都て此の樣の手段種々有り油斷すべからず一手一手心付指事肝要なり

裏四間請ハ多川五一組にて請る但し四八飛と廻る時に四三銀上り請けるなり尤も宗桂八五桂を躍ねずに六五歩突くなり多川ハ若し八五桂を躍ねバ八八角引く六五歩ならバ五五歩同角の時八六歩なるべし能考ふべし五七銀ハ惡しかるべし

駒組調上に敵仕掛を見合せて王の脇へ金銀を上り見合せの時ハ四七歩を切て見合せ宜し表四間ハ一五金寄宜し表四間請ハ一五金ハ終りの勝なり七六銀八五桂八八角五六歩五八金と差すハ秘する處なり

四八銀上り方よし

先手方角の上り方注意して可なり

第三十八圖

平手（居飛車四間）其一

香	桂		金	飛	銀	角	桂	香
歩			歩	歩		歩	歩	歩
	歩						王	
							銀	
							歩	歩
	飛		金	銀		王	角	歩
	桂			歩	歩	銀	桂	香

（說明）七六歩　三四歩　二六歩　四五歩　三八角　四八銀　三六銀　五四歩　五八金右　四二飛　六八王　六二王　七八王　七二王　九六歩　四九歩　三六歩　八二王　七七角　夏七二銀

（後手）六八角　四五歩　八八銀　五二金　二四歩　同歩　同角　同角　同飛　二三歩　八飛　卷三角　三一角　四六歩　同歩　同飛　三一る　四二金　寄二歩　打四一金　二一歩　成三一金　同。とにて先手方宜し

（變化）卷三角　打の處二角　七七角　打同角　同銀　二角　六六角　同角　同銀　二角　八六角　打四一飛　五七銀　上にて先手方宜し此末六八金上りて七七桂ト上り三七桂と上りて五五歩と突捨て五五歩ト打工風にて宜し

（變化）夏七二銀の處四三銀　四六歩　七二銀　六八銀　五二金　四五歩　五五歩　同歩　四五歩　三五歩　同歩　二四歩　同歩　五四歩　五五歩　八六角　五四銀　三四歩　四六角　二四飛　二二歩　打にて先手方大に宜し

。とにて取る飛先き破り易し、下手方ハ專ら角の活働を計るとを肝要とすべし

然らバ則ち下手方の進路に妨碍あらバ睫屬の細かきものと雖ども亦た尙ほ拂拭せざるべからず、心を用ふること此の如くなれバ下手方の駒ハ悉く皆な角筋に緊接して以て終に下手方の勢力を增すに至るべきなり

此將棋双方對壘の形勢を觀察するに下手方最も苦心經營せずんバあるべからざる所あり、故に前に云ふが如く角筋に雜駒を緊接し上手方其首を擊たバ則ち下手方の尾至り上手方其中を突かバ則ち下手方の首尾共に至りて率然たること常山の蛇の如くなるべきを要す、此に至らバ則ち上手方如何ゑ張膽鼓勇して下手方に向へ來るも亦た安泰なり何の驚くべき所かあるべけんや

啻に其驚くべき所なきのみならず下手方ハ其盤上を濶步横行して遂に下手方ハ上手方を坎陷せしむるに至るべきなり、下手方ハ細心精考して此定石の理趣を圓滿に應用する所あるべきなり

五五の歩面白し

先手方二四の歩機を察すと肝要なり

第三十九圖

平手（居飛車四間）變化　其二

香	桂		金	飛	銀	角	歩	歩
								香
歩			金		銀	王	桂	香
	歩			歩		歩	歩	
		歩			歩			歩
			歩			歩		
	飛		角		王		銀	
	桂		金		王		桂	
		歩		歩		歩		香

（説明）七六歩　三四歩　二六歩　四四歩　二五歩　三三角　四八銀　三二銀　五六歩　五四歩　八金　四二飛　六八王　六二王　七八王　七二王　九六歩　九四歩　三六歩　八二王　七七角　七二銀　六八角　四五歩　八八銀　五五歩

（後手）同歩　五二飛　七七銀　五五飛　六六銀　五四飛　七七角　春六四歩　五五歩　五五歩　打四三銀　二四歩　同歩　三七桂　飛にて先手方五五歩の位徳にて指克し後手方五二飛と廻りしとき先手方二四歩と突てゝ先手方面白からず

（變化）春六四歩の處　五六歩　打五五歩　五二飛　三五歩　同歩　二六飛にて先手方指克し五六歩の手五五歩のときゝ三七桂にて指克し

後手方の五五歩と突き掛けるより五二飛と廻るとき先手方銀を六六へ出で角七七歩上り後ちよ至り五二へ飛を退け又五五歩と打ち置く手堅しと云ふべし夫れより二四歩と切り後ち方略あるべし

後手方劈頭に天關を開かんとすれゝ先手方も亦た之に對して天機を踏破し進んで意氣豁如たるを見る何等の好手ぞ、殊に夫れ五五飛を退け五五歩と打ち置く手の如きゝ實に相手方を一丸と爲して掌上に弄ぶの觀あり

之を要するに此一番の指手い皆な警拔の考案と雄健の手段とを盤上に現はして躍如たらしめたり、眞に深幽遠玄の光彩を揮發せしものと謂ふべきなり抑も棊を學ぶい指手の熟達するにあり、其據る所い定石にありと雖とも亦た自ら胸臆を攄べ機軸を出して一己の手を爲す所なくんばあるべからず、考思を以て主と爲し定石を以て客となし之を實地に指試し秩然として序あり粲然として規あり洋々乎として躰あり要あり、汎く古人の定石を取り來りて以て融化混成し棊手に熟達するを肝要とす彼の區々たる刀斧にのみ汲々として沈晦手を顯はすことを思はざる者い愚なり

然るに之を顧みずして區々たる刀斧のみ汲々たることあらんか焉んぞ沈晦手を顯はすことを得べけんや、其沈晦手を顯はすこと得べからずんば則ち定石を學ぶも亦た利益なきなり深く茲に考ふる所なくして可ならんや

先手方五六の銀上るよし

三二の銀に活法あり

第四十圖

平手(居飛車四間)變化　其三

香	桂							香
歩	歩	角	銀	飛	金	歩	銀	王
		歩				歩	歩	歩
歩			歩	歩	歩			
	飛				銀		王	角
香	桂		銀		金			桂
			金					
								歩
								香

（説明）七六歩 三四歩 二六歩 四四歩 二五歩 三三角 四八銀 三二銀 五六歩 二飛 八五金 二六王 八七王 二八王 九六歩 四九歩 五五歩 二七銀 五七銀 四五歩 八六銀 夏五二金 五六銀

（後手）四六歩 同歩 同飛 五七銀 四二飛 六五歩 四六歩 三六金 四六銀 三五歩 七四歩 二四歩 同歩 四四歩 冬三二銀 三四歩 四角 四五歩 二二角 四飛 二三歩 打二六飛 引にて先手方位勝にて指克し

（變化）冬三二銀の處 同角 二飛 二四歩 三四歩 五四歩 五五歩 四二角 五四歩にて先手方宜し且 四二飛の手 九飛の成ならば 四八銀 ト引て飛車を取りて指克し

（變化）夏五二金の處 四三銀 二四歩 同歩 五四歩 八四歩 八角 同王 五四銀 七三角 同角 同桂 二四飛 二二歩 打二三歩 打四六歩 同歩 四五桂 六六銀 上ルにて先手方宜し且 五五歩の位を大切に心得て突惡しき時は負るものなり只敵方の駒離れ等の塲合見て突捨る時は必ず利あり能々勘考あるべし

（變化）秋八二王の處 四三銀 五七銀 四五銀 五五歩 七六銀 五五歩 四六歩 二六飛 四六歩 同歩 四四飛 四五歩 同飛 七七桂にて先手方宜し

先手方の駒立て總て差し込みにて勝色なり相手方飛先きを顧まぬ樣心掛け肝要なりとす

先手方變通の機略多からず索然として興味なきが如しと雖ども、亦た其一手は一手より雲を拏り霧を拂ふて相手方の障碍する駒を掃蕩する底の狀あるゝ誠に是れ妙手と云はざるべからず、世の徒らに定石摸型中に箝制せられて獨自一個の考策なきもの宜しく此れ等の定石を攻究して棊才を暢發すべきを要す

總して棊手は愼重なるを要旨とすれども、前の駒組の如く突兀なると奇峯面を掠めて起るの趣きあるゝ是れ畢竟するに棊手老練の致す所にあらざるなきを得んや、若し夫れ此の如き定石を摸範と爲し習熟する所あらば則ち必す上達すると速かならんのみ

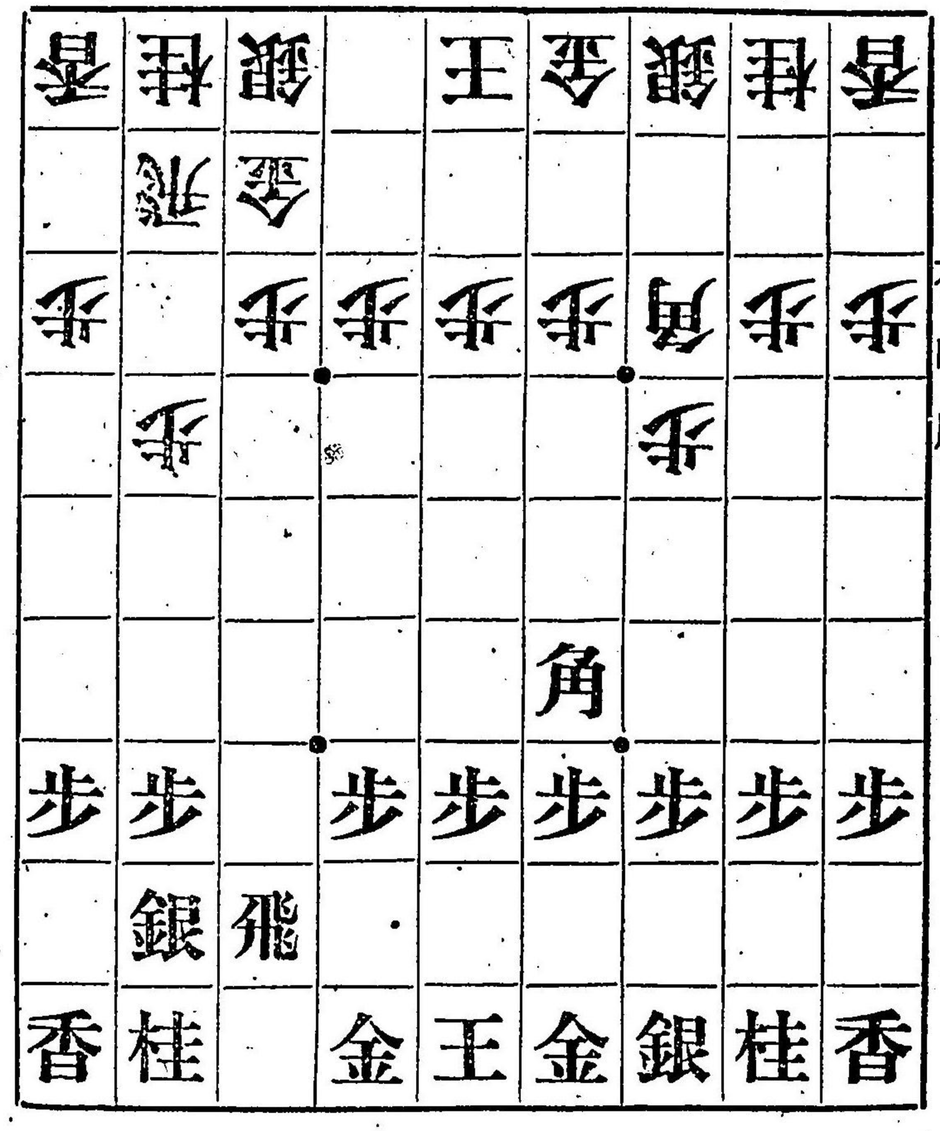
然りと雖とも其突兀なる所は自然にして是れ突兀なるものなり猥りに需めて然るものにあらざれば、初學の者能く茲に意を注ぎ自然の棋理に背くとなかれ

七二の金上る手よし

先手方角の進退を自在ならしむるを要す

第四十一圖

平手（石田崩）變化　其五



（説明）七六歩　三四歩　七五歩　八四歩　七八飛　八八角　同銀　三三角打　七四歩　同歩　四六角打　七二金　巻四七飛　三七歩　八七飛

（後手）八五歩　七七銀　五四歩　五六歩　四二銀　四八王　五三銀　三八王　六四歩　五八金　六二銀　二八王　六三銀　三八銀　七四歩　一六歩　四一歩　此末後手方三一王ト指す其後七三桂と刻ね六五桂と刻ねて後手方指宜し

（變化）巻四七飛の處八四角　同銀　七四飛　七三銀　七八飛　○四五角　五八金　左二七角　成二五飛　打七七歩　打同桂　五四る　六五桂トフ七七歩　同銀　二七歩　七三桂　同金　七九飛　八七るにて後手方指克し且六五桂の手　二三飛　成二銀　上り　二五拔　六四歩にて宜し又同桂の手を七八飛ならば四九る　同王　七八金にて宜し

（變化）○五八金　左の處六八金　二七角　成二五飛　五四る　二三飛　成二銀　二五拔　六六歩　二八歩　四四る　七七銀　二五るにて後手方指克し

此將棋ハ雙方俱に互角の駒立てとす後手方先手の角ヨ注意して飛を搏し弱を擊つの手段を施すと肝腎なりとす

此の如く指行かば先手方ハ如何ヨ奇謀を回らして後手方を防禦すと雖ども必た能く其目的を遂るとを得ずして先手方全く敗を取るに至るべきのみ

熟々此駒立の形勢を視るヨ老手苦心の定石賞心愜意の闘棋と云ふべきなり、殊に後手方が

先手方の角に注意して飛を轉ずる所ハ精彩の指手にして後愈々其深刻なるを見る、先手方ハ自己の患ひあるを悟り包面疾走して行路の左右を顧みるの遑なく後手方の窘束し來るを防ぐと雖ども亦た既に手段通暢を欠き晦澁を致し、反つて我手段を敵方の抵掌に資するの觀を現ハすに至る豈に亦大いに惜まざるべけんや毫釐の差ハ千里を誤る一手緩漫なる所あれば、强固の駒組も亦忽ち崩るに至る深く警めざるべけんや

既に前に言ふが如く此定石は互角の形勢あり故ゑ先手方勝つか後手方勝つか漠々として測り知るべからずと雖ども、其巧心算を回らして妙手段を施すとあらば其必勝ハ先手方後手方孰れか一方ゑあらんと知り得べきなり

先手方飛先注意すべし

五三の銀上る手意味深し

第四十二圖

平手(石田崩)變化　其五

香	桂		金	王	金	銀	桂	香
						飛		
歩	歩	角	歩	銀	歩	歩		歩
		歩		歩				
	歩	歩	歩	歩	歩	銀	歩	歩
		王		金		飛	桂	香
		銀			金			

（說明）七六歩　三四歩　七五歩　八四歩　春七八飛　八八角　同銀　三三角　四八王　二八銀　三五歩　七七銀　五四歩　五八金　二四銀　一六歩　五三銀左

（後手）二八王　六四銀　八八銀　八六歩　同歩　同飛　八七歩　二八飛　三八銀　二二金　此末七五銀ト歩取りて後手方指克櫓し

（變化）春七八飛の處　七四歩　同歩　二二角　同銀　五五角　三三角　二八角　同銀　八八銀　九五角打にて後手方指克し且つ七八飛と廻りて宜し又七四歩と突手い宜しからず

後手方六四銀と上り飛先きの歩を切り置くと宜し此後ち飛角何れにても成り込み相手を侵すの方略を施すことを要す

然らば則ち先手方も亦た後手方に對するの手段を出すべきに依り後手方い其注意なかるべからず、彼れ一手我れ一手一手若し誤らい則ち奔騰奮踊千里の馬が埒外に逸出して巨濠を一跳躍するが如き概あらば其危險も亦た思ふべきなり

一五銀上るに手あり

四二角打て大に利あり

第四十三圖

平手（捧銀受）變化　其六

香	桂		銀	金	角	金	王	
歩	歩		歩	銀	歩	歩	歩	
				歩	歩		歩	歩
								歩
		歩						
	桂	飛						
香	歩		香	桂	飛	歩		歩

（説明）七歩三歩二歩八歩二歩八歩七金三金二角同銀八銀三銀七銀三六銀三八銀四五歩二銀二五金六歩四歩六歩四歩五歩五歩八歩二銀四四歩　夏一五銀四二角打

（後手）六王四金五王四王六角二銀引二四歩同歩同角春同角同銀二三歩一五銀五七角打にて後手方九王三金六歩一八角二銀四歩

指克し

（變化）春同角の處三桂六八角引五五歩同歩五六歩打此如指ても後手方面白し但し棒銀とて此如く飛車先へ銀を操上げ來るときん請方も必ず三銀を二銀と引て請ること宜し又敵地に打込等あるときん銀と銀と替りても苦しからず此指方の勝負ん銀と銀と替ると替らぬよある故能々意味第一に肝要なり

（變化）夏一五銀の處三六歩四三金六九王三五銀五八金四一王三五歩六四角打五六角打四五歩六六銀五四銀三四歩同銀にて後手方大に指克し但し三五歩の手四六歩四角打三七銀引五五歩にて指克し

先手方六八角と打つときに二銀と引く手妙なり二三歩と打ち銀を一五へ退け五七角と打つこと強みあり故に後手方に充分備はりて指手なくんばあるべからず、之を要するよ此の如き駒組の時下手方ん蕭然として心を收め其一手ん一手より上手方の手段に對し緊切なるに

至らば、昂然眉を揚げ更に一手以て敵勢を震撼せしむるの策を施すべきなり

夫れ然り其敵勢を震撼せしむるにん險を畧取するにあり、其險を略取せんと欲せば則ち一にして十に當り十にして百に當り百にして千に當り千にして万に當るの指手ならざるべからず、寡能く多を制し柔能く剛を制し物と推移りて變動常なきものん碁道の本領なり故に其機勢如何を考ひ其攻守の得失を量り其虚實の利害を慮りて以て、策略を回らすに遺漏なきを期せずんばあるべからざるなり

此定石上手方に於て若し或ん扞然として跳梁呼號するの狀あらん乎、下手方安んぞ猶豫するを得んや宜しく臨直に騎虎の勢ひを以て彼れに攻め向ふべし

三四の飛考ふべし

六二銀上る手よし

第四十四圖

平手（中飛車）變化其七

香	桂	銀	金		飛	銀	金	王
歩				歩		歩	歩	歩
				角				
					歩			
歩		飛		歩	歩	歩	王	金
香	桂	銀	金			銀	金	歩

五五歩留

（說明）七六歩　三四歩　二六歩　五四歩　二五歩　五五歩　二四歩　同歩　同飛　三二金　三四飛　二五飛　夏三六飛　四四角　春六八王　二六銀

（後手）七八王　五三銀　四八金　七四歩　六八銀　四一王　六六歩　五四銀　三四飛　三三金にて後手方指克し

（變化）春六八王の處　四八金　六二銀　七五歩　五三銀　七八金　六四銀　七六飛　四一王　六九王　四二銀此如くなる時ハ先手方手詰り故宜しからず

（變化）夏三六飛の處　二四飛　五六歩　同歩　八八角　同銀　三三角　二二飛成　八八角成　二四桂　二三桂成同飛同　歩同銀より

て後手方指克し但し二一飛成の手二八飛ならバ五六飛にて後手方宜し

先手方飛の行き方に弱みあり飛の方略惑しけれバ勝つべき手なし後手方是れに乘じて徐ろに其攻略宜しきを得バ勝利なりと知るべし

先手方の飛を使ふと何ぞ其緩漫なるや然れども圖外の風波を凌ぎて桑蓬萬里奇策を四方に求め考ひざれバ好手を施し得べからず、故に後手方も亦た先手方の緩漫なるを見て放心するを得ざるなり切に自陣を擁護して奮戰するとに心を用ふべし

能く技に熟達する者ハ先敵の勢ひ如何を料りて動く之を以て虛を突き之を奪ふなり、能く敵の駒を奪ふて敵に我駒を奪ハれず奪ふハ心の機なり動作の機なり飛角の動作ハ雜駒の

動作する機を一にするよあり、雜駒の動作審かならざれば則ち屢々變ず屢々變ずれば則ち飛角能く動作せしむるも亦た雜兵能く動作せしむると得べからざるを奈何せんや、深く考ふ所なくんばあるべからず

然りと雖ども其の變動の機を見て動作するに苟しくも不可なることあらばしばらく夫の三軍の攻めを啣み旗を捲きて唯だ敵勢如何を潛視するの狀態あるを要す、此の如くして苟しくも變動の機に到らば則ち其の焦思華慮せる所を以つて衆駒一齊の働らきを爲さしむべきなり

後手方飛の動きを肝要とす

七七の角考ふべし

第四十五圖

平手(中飛車)變化　其八

香	桂	銀		王	金		桂	香
歩	歩		歩	銀	歩	歩		歩
		金					飛	
		歩	角					
				歩				
			歩			歩	歩	
	飛				銀	王		
	桂		金	歩	角	歩	歩	
香				歩			桂	香

（説明）七歩三歩二歩五歩二歩同歩同飛三金春二飛二歩四歩六歩四歩五歩五歩四歩六歩八銀五歩七角

角二飛八四歩六八銀八五歩七角

（後手）七四歩六六歩七五歩六七銀七二飛七五歩六四銀七六銀四一王五八金七五銀同銀同飛にて後手方面白し

（變化）春二六飛の處二五飛五二飛二四歩三三桂二八飛○二五歩三六歩三五歩同歩五四飛三八飛四五桂四八銀五六歩同歩

同飛五八歩八八角同銀五五角打にて後手方指克し

（變化）○三三桂の處五六歩八八角同銀五七角三五角打にて先手後手午角の形勢なり但し五五歩と留られて先手方面白からず必ず五六歩と受て指すこと肝要なり

後手方七四歩と突き置き飛七二へ廻し銀の取換へ手大よ指手宜し先手方兎角受方となりて面白からず

後手方の手段ハ簡潔にして別に城府を設けずと雖ども亦た能く敵の侵略を防ぐに足れり、之を要するに後手方の指手ハ最初より皆能く棊道の秘契よ中れるが故なりとす

何をか棊道の秘契と云ふ乎曰く他なし内ハ以て固く守るへく外ハ以て戰ひ勝つべし、戰ひ外に勝ち備へ内よ主す勝ち備ハり相應すると猶符節を合するが如くなり故に勝つべきを見て起り勝つべきを見ざる時ハ止む患ひ我領内近きにある時ハ、其近き所を堅ふし患ひ我領内遠きにある時ハ其遠き所を固ふして後ち苟も進んて利ありと認めハ則ち膽を張り疑ハしき虚かりを絶ち堂々として戰を決すべきのみ

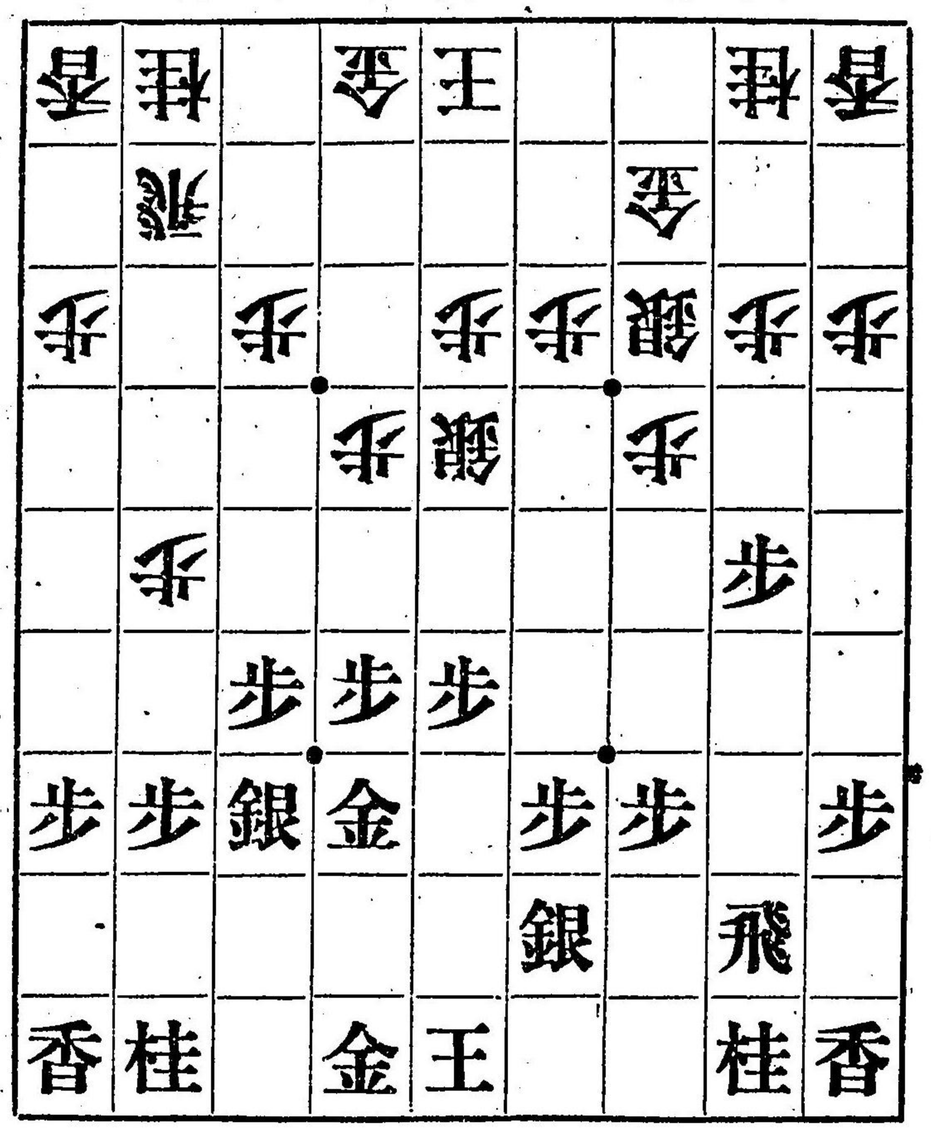
要するに此定石ハ先手方角受け所に創見精察なかるべからす、然らされハ終局に至るまで後手方より飜弄せられて止むとなかるべし若し先手方に於て角受けの妙計を施し早く後累を絶ち置かハ、此定石の形勢に於て先手方の負る道理ハ決して之あらざるなり先手方ハ能く思ひを潛めて工夫せよ

五四銀にて勝也

後手方角の運用に妙あり

第四十六圖

平手（腰掛ケ銀）變化　其九



（說明）七六歩八四歩　二六歩八五歩　二五歩三七金　三四歩八七角　同銀二八銀　四三銀八七金　五二銀六四歩

六六歩六三銀　六七金五四銀

（後手）六八王五二金　七八王四四歩　五七銀四二王　六八金七四歩　春四六銀　三一王五四歩　三四銀三六歩　二二王三五歩　九四歩三四歩　同銀左三五歩　四三銀九六歩　三八歩同飛二七角打　二八飛六三角成にて後手方面白し此末四五歩と突き四四銀と右を上る手段宜し

（變化）春四六銀の處　四六歩三二王　三六歩七三桂　一六歩九四歩　九六歩四三金　一五歩六五歩　二六飛三七桂　四七角打一六角　打三五歩同歩六六歩同銀三六歩打よて後手方指克し

先手方角の打ち込みの手を相手方に與へしより折角駒立て宜しかりしも傷み出來し爲めよ充分の進擊成り難し、後手方六三るの筋により相手方の駒を困しむるの手段最とも宜しとす

此將棋先手方い進んて相手方を攻めんよりい寧ろ退きて自陣の備ひを堅ふするに如くはなし、其備ひ堅くなりて指手に餘裕綽々として遐邇に寛かなるよ至らが進んで相手方を攻め始ひべし

棊道を學ぶ者ハ盤上の變動常なくして敵ニ因て轉化す事の先たらざれバ動きて則ち隨ふ故に能く無彊を圖り制して威力を扶成し唯た强きを貪らず能く微を守りて自領を保ち時機ニ應して之を舒るを要す、前の先手方の駒立の如きハ最も此心得あることを要するなり自領空虛にして敵の堅きに當らんと欲する時ハ一敗地に塗れざるもの殆ど稀れなり、豈に深く戒め省みる所なくして可ならんや

夫れ然り先手方にして唯だ强きを貪らず能く微を守り自領を保ち時機に應して舒るの駒立を爲すことあらん乎、後手方ハ勢ひ全く挫けて亦た其挫勢を鞭韃し弱勢を扶植し得るの途なかるべきあり先手方ハ專ら前に言ふが如く指行くべきを要す

四六の銀に手あり

突き歩に後手方注意して可なり

第四十七圖

平手變化其十

香	桂							香
歩	歩				金	王	金	歩
							銀	歩
					歩	歩	銀	歩
	歩						歩	歩
								歩
歩	飛						飛	歩
香	桂	歩	金	金	歩	銀	桂	香

（説明）七歩八歩　六歩四歩　二歩六歩　八歩五歩　二歩五歩　三金二歩　七角七歩　三角四歩　七銀八歩　七角七歩　同銀二歩　四銀八歩　三銀五歩　金二六歩　六歩四歩

六歩六歩　三銀六歩　七金五歩　四銀六歩　八王五歩　二金七歩　八王五歩　四歩五歩　七銀四歩　二王六歩　八金上ル　七歩四歩　六銀

（後手）三一王五歩　五四歩　三銀三歩　六歩二歩　二王五歩　七銀引九歩　四歩九歩　六歩一歩　四歩五銀　六銀七歩　三桂四歩　六歩春五歩　四歩同歩　同銀三歩　五歩五歩

打三歩五歩　六歩三歩　同金二歩　四歩同歩　五歩同歩　七桂一歩　三桂二歩　四歩打にて先手方指克し但五歩打の手同

歩ならは三歩にて宜し又四金ならハ五歩六銀四歩　三歩五歩　二歩四歩にて指克し

（變化）春五歩　四歩の處六歩　五歩同歩　九角三歩　八飛八歩　四角成六歩　六角打八歩　三る二歩　八飛七歩　二る四歩　五歩同歩　四歩同歩　五歩同

歩三歩　七桂四歩　四銀左五歩　四歩同歩　五銀四歩　五歩同銀　四歩五歩　三銀二歩　五桂にて先手方指克し

先手方銀を五七へ引き趣向を變じ五四銀を捨て王の頭へ攻め歩を二四二五と引上ぐる手妙なり、後手方の三三銀を閣きし手は面白からず

故に後手方は甄別明析錙銖を差ひざる底の棊眼を以て盤上を見渡し彼我優劣指手得失等を深く考究して先手方に對する所なかるべからず

總して將棊は駒立が大事なり駒立を大事にせんと欲せば則ち行列を定め縱横を正ふし名實を明らかにし、立て進むハ俯し居なから進むものハ跪づく如く遠くの駒の覗ふハ則ち畏れず近くの駒覗ざる時ハ則ち散せす一意氣力の强壯を以て敵に對すべし、氣盛んに力餘りあれば則ち久しきよ耐へて勝つことを得るものなり一手一手と打ち行き久しきに渉らば必ず孰れか氣弛み力拔けん此機即ち双方勝敗の相分るゝ所にして、是れよ乘して攻めんと欲する者又其攻め來るを防がんと欲するとハ孰れも苦心刻思を要するものなり

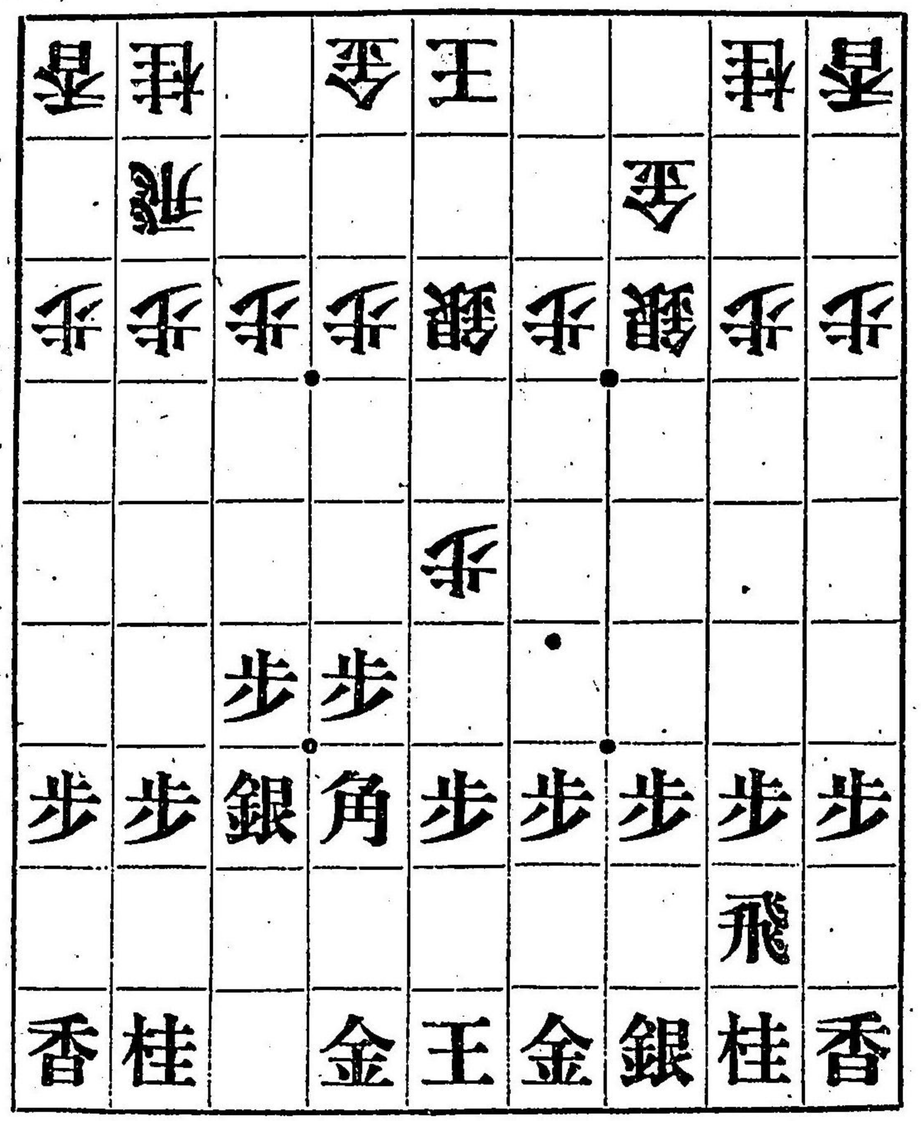
何となれハ則ち其攻めんと欲するにハ其攻むへきの機略を以てせざるべからず又其防がんと欲するにハ其防くべきの謀計を以てせざるべからず故に其攻むべき機略と又其防ぐべき謀計とを講究するハ其最も苦心刻思を要すると亦た以て知り得らるべきにあらずや、夫の疎放無稽の人何ぞ此に反省する所あらざるや

後手方角先さを守るべし

後手方打角に利害あり

第四十八圖

平手（違筋角）變化其十一



（說明）七六歩　三四歩　二角同銀　四五角打　六二銀　三四角　三二金　八二銀　三一銀　五六角　春四歩　六五歩　五三銀　七六歩　七五歩　五四角　八六歩　同歩　三八

（後手）六四歩　七八金　七四歩　四八銀　五四銀　二六歩　四五歩　二四王　六九王　五二金　一六歩　六二飛　二六飛　四三金　一五歩　四五歩　五八金

四四角打　二八飛　三四銀　此末六五歩と突掛けて後手方宜し但し違筋角い其角の頭を指す工風にて宜し

（變化）春五四歩の處　八四歩　七七銀　八五歩　八八飛　四四銀　四六歩　五五銀　七八角　四六銀　四二金　七九王　四一王　八六歩　同歩　三八

歩　同金　八六銀　八四歩　八五歩　同歩　同銀　○八四歩　打同銀　同金　八三歩　打にて先手方宜し

（變化）○八四歩の處　四四角　八七飛　八四歩　同銀　同金　八三歩　八六歩　同飛　八五歩　八二歩　成八六歩　七二と　五一銀　六二と　四二銀

六二と　三一玉　八二飛　打にて大概い先手方勝筋なり且違筋角と打れたるとき飛車先を突き是い此如の痛みあり必ず飛車先の歩を突くべからず肝要なり

後手方二六飛上るとき四四角と打つと宜し、而して三四銀上り相手方の角先さを禦ぎたるの指方強みありて太だ宜し後手方い角筋を專ら破るの方略を爲さゝる可らず

凡そ敵を破らんと欲せば則ち我備ひを亂るものなり、故に古今名人上手は定石の中に於て我駒立を亂し堅さを破ると潰する如くするものあるを見るい即ち敵の危機あるを看破した

る時に限る、然らざれゞ則ち一意我將を重りし壘を高ふして圍みを堅ふしたる後ちに始めて敵に向ふ而して其敵に向ふに方りて謀るとある駒ゝ、之を近づけ援けと爲すべき駒ゝ之を聯す敵する駒ゝ之を害し横ざる駒ゝ之を挫き畏るゝ駒ゝ之を隱し降る駒ゝ之を免し堅きを得てゝ之を守り阨きを得てゝ之を塞き、難を得てゝ之に忍し地を得てゝ之を割き敵に順ふて之に對し勢ひに因て敵を破るを秘契とするものなり

之を要するに此定石ゝ後手方が先手方の角筋を專ら破らんと欲するにあるものなれゞ、先手方ゝ鋭意彼れに其角筋を破られざるの備ひを立てるを緊要とす

三三桂意味深し

後手方英斷を以て利益あり

第四十九圖

平手捨飛車變化　其十二

香		銀	金	王		銀	桂	香
		金						
歩	歩	桂	歩	歩	歩	歩		歩
							飛	
	飛	歩						
歩		歩	銀	金	歩			
香	桂	王	金	銀	歩	歩	桂	香

（説明）七歩六　三歩四　二歩六　八歩四　二歩五　八歩五　七金八　三金二　二歩四　同歩　同飛六　八歩六　同歩　同飛六　二歩三　八歩七　打

八飛四　四銀六　三歩五　五歩六　八角八　同銀三　桂三　夏七銀七

（後手）二歩四　六王五　二歩五　二飛八　二飛四　一歩七　一歩四　春八　三金五　一歩七　五銀六　一歩六　同歩　一歩八　同飛六　二歩六　同歩　四九角　打

二飛八　三角八　同飛六　二飛六　にて後手方指克し

（變化）春八　三金七　五銀二　四銀六　四銀四　三飛八　六角　打三　一角　打六　二歩六　同歩　同飛五　二歩八　二飛四　四歩八　三金五　四歩七　五

銀三　四銀　此如　駒組となりてん先手方面白からず

（變化）夏七　七銀八　二飛四　二歩七　五銀五　二歩六　四銀四　三飛八　六角　打四　二角　打八　三金四　一歩六　三歩五　同歩四　三歩九　七飛六

王二　二銀七　二金三　二銀七　七銀四　四歩六　三金五　四歩五　五銀四　三歩　打　よて先手方宜し

後手方駒組み宜し歩を一八へ打ちて飛を寄せ若くん飛を二四へ廻し四九角打ち夫れより二六へ飛行くん大に利ある指方なりとす、之を以て先手方ん兎角手際捗々しからず

倩々此後手方の駒組みを考ふるに一手ん一手より終局に貫通するを主とせるものあるに依り、喩へば猶ほ主脳の經絡能く全躰に通じ四肢百骸皆爲めに活動の機を得たるが如し先手方の兎角手際捗々しからざるものあるも、亦た後手方の駒組其宜しきよ素因するにあらざるなきを得んや

凡そ飛角ん將帥なり心なり金銀桂香歩等ん皆な雑兵なり支節なり、其心動くに誠を以てする時ん則ち支節必ず力めり其心動くに疑ひて以てする時ん則ち支節必ず背く夫れ將帥制を心にせず、雑兵節を以て動かずんば勝つと雖ども幸にして勝つなり我れを畏るゝ時ん敵を侮り敵を畏るゝ時ん我れを侮る侮らるゝ者ん敗れ威を立る者ん、勝つ威ん將帥飛角の立る所にして愛ん雑駒の從ふにあり詮するよ棊を闘んして其勝敗の分るゝ所ん唯だ動機脈々の裡よりて存ずるものなり、之を以て能く敵の秘を探り能く敵の隠を索りて以て能く自己の手段を施すと巧みなる者ん必ず勝たずんばあらざるなり、初學者深く之を思へ亦た心中大いに悟る所あるべきなり

新定跡按

高等將棊秘訣

坤の卷大尾

新按定石高等將棋秘訣の附錄

將棋段位駒落圖は初心の人の爲めに掲げ示すものなり最强を名人と云ひ（即ち九段）次を半名人と云ひ（即ち八段）次を上手と云ひ（即ち七段）次を上手開と云ふ（即ち六段）五段を上手並、四段を强片馬、三段を並片馬、二段と初段とを手直りと云ふなり

	九段	八段	七段	六段	五段	四段	三段	二段	初段
香車	半名人	香車 交 平手	上手	上手開	上手並	强片馬	並片馬		
香車	定	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
角行		定	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
飛車			角行 交 香車	同上	同上	同上	同上	同上	同上
香車				飛車 交 角行	同上	同上	同上	同上	同上
香車					定	同上	同上	同上	同上
香車						一枚半 交 飛車	同上	同上	同上
香車							定 飛車	同上	同上

盤面の相紋は即ち下に掲る圖を見て知るべし此圖の一二三の數字と定石の數字とを引合せば駒の動作は獨り知らるべきなり

一ノ一	二ノ一	三ノ一	四ノ一	五ノ一	六ノ一	七ノ一	八ノ一	九ノ一
一ノ二	二ノ二	三ノ二	四ノ二	五ノ二	六ノ二	七ノ二	八ノ二	九ノ二
一ノ三	二ノ三	三ノ三	四ノ三	五ノ三	六ノ三	七ノ三	八ノ三	九ノ三
一ノ四	二ノ四	三ノ四	四ノ四	五ノ四	六ノ四	七ノ四	八ノ四	九ノ四
一ノ五	二ノ五	三ノ五	四ノ五	五ノ五	六ノ五	七ノ五	八ノ五	九ノ五
一ノ六	二ノ六	三ノ六	四ノ六	五ノ六	六ノ六	七ノ六	八ノ六	九ノ六
一ノ七	二ノ七	三ノ七	四ノ七	五ノ七	六ノ七	七ノ七	八ノ七	九ノ七
一ノ八	二ノ八	三ノ八	四ノ八	五ノ八	六ノ八	七ノ八	八ノ八	九ノ八
一ノ九	二ノ九	三ノ九	四ノ九	五ノ九	六ノ九	七ノ九	八ノ九	九ノ九

此盤面いろは符號は即ち定石の變化する所を知るの符號に多く用ふるを例とす併し乍ら盤面にいろはを配置すれば此圖の如くなるものなり

い	に	ほ	へ	と	ち	り	ぬ	る
ろ	は	ま	け	ふ	こ	て	あ	さ
は	ま	ち	む	う	の	く	や	き
ね	な	ら	む	う	の	く	や	き
つ	ね	な	ら	む	う	の	く	や
ま	け	ふ	こ	て	あ	さ	き	す
ゆ	め	み	し	ひ	も	せ	す	す
一	三	六	七	八	十	百	千	万
万	花	月	春	夜	秋	冬	雪	山
柳	橋	松	梅	桜	露	霜	雪	山
若	川	海	里	村	森	弁	草	石

此下に掲るものは對手の駒組及び番面の數字割なり

此下に掲るものは駒の略、成兩符號を示すものなり請ふ孔細に其正字と引合せて看よ

新按定跡高等將棋秘訣の附錄畢

正紋略符号成符号

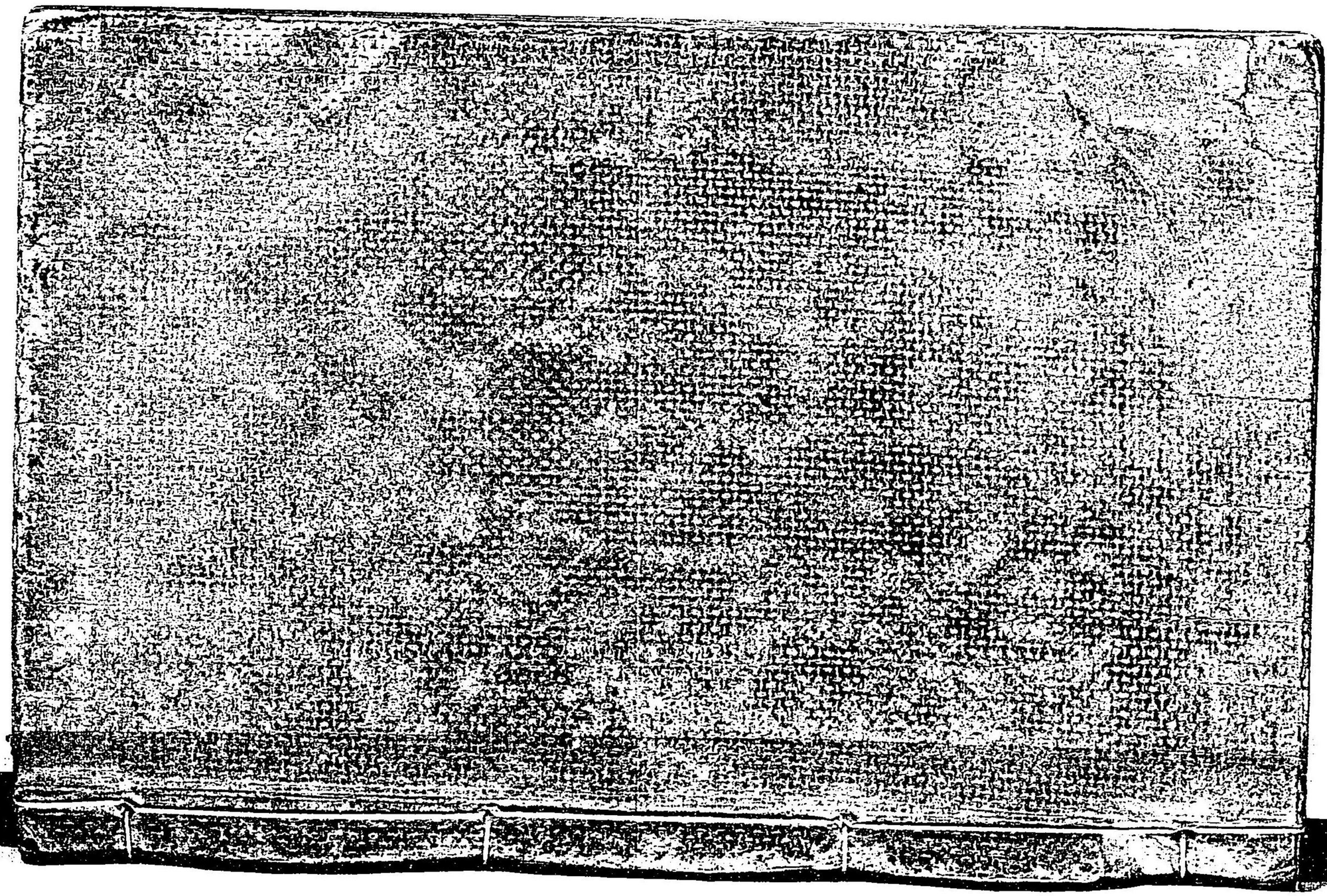
王	王	飛	飛	角	角	金	銀	桂
		飛	龍	角	馬	人	王	土
香	香	歩						
禾	重	丶						

明治廿七年六月廿六日印刷
同　年七月　五日發行

定價金貳拾五錢

愛知縣名古屋市門前町十七番戸　發行者　三浦兼助
東京々橋區三十間堀二丁目一番地　印刷者　深谷仙三
東京日本橋區通三丁目　賣捌　覺張榮三郎
大阪市心齋橋北詰　競爭屋芳松
京都市寺町二條下ル　梅原支店

版權所有

其中堂發兌圖書販賣所

東京日本橋區通一丁目　大倉孫兵衛
同　通二丁目　小林新兵衛
同　通三丁目　丸善書店
同　通四丁目　金櫻堂
同　通四丁目　春陽堂
同　通四丁目　東雲堂
同　南傳馬町一丁目　吉川半七
同　同　辻本九兵衛
同　同　二丁目　青木嵩山堂
同　同　目黑書店
同　同　三丁目　中川書店
同　銀座三丁目　山中孝之助
同　本石町二丁目　上田屋書店
同　神田表神保町　中西屋書店
同　同　開新堂
同　同　裏神保町　三省堂
同　同　富山房
同　本郷二丁目　硯文堂
同　日本橋區室町　杉本七百丸
同　大傳馬町一丁目　長島書店
同　二丁目　柏屋新次郎
同　横山町一丁目　出雲寺書店
同　兩國若松町　柳原友吉
同　日本橋新大阪町　鶴喜書店
同　淺草三好町　大川屋錠吉
同　廣小路　淺倉久兵衛
同　本材木町　林平次郎
同　芝愛宕下町　鴻盟社
同　同　須原屋富吉
同　飯倉五丁目　森江佐七
同　大阪備後町四丁目　梅原龜七
同　同　吉岡平助
同　北久太郎町四丁目　柳原喜兵衛
同　博勞町四丁目　中川勘助
同　安堂寺町四丁目　青木恒三郎
同　心齋橋北詰　中村芳松
同　本町四丁目　岡本仙助
京都佛光寺烏丸東　東枝律書房
同　三條通寺町東　福井源次郎
同　寺町通四條上ル　田中治兵衛
同　寺町通五條上ル　藤井佐兵衛
同　三條通高倉東　出雲寺書店
同　三條通御幸町角　大谷仁兵衛
同　富小路三條上ル　中村淺吉
大津　澤宗次郎
同　小川儀平
四日市　伊藤善太郎
桑名　森傳四郎
津　河島書店
松阪　豐住謹次郎
同　中西嘉助
山田　有文堂
上野　安屋勝二郎
名古屋京町　鈴木吉兵衛
本町三丁目　川瀨代助
同　五丁目　若山文次郎
玉屋町一丁目　豐田樂三郎
同　二丁目　小澤吉三郎
同　三丁目　片野東四郎
鐵砲町二丁目　三輪文次郎
門前町二丁目　尾頭吉次郎
同　三丁目　淺見鉦太郎
同　四丁目　稻垣勝之丞